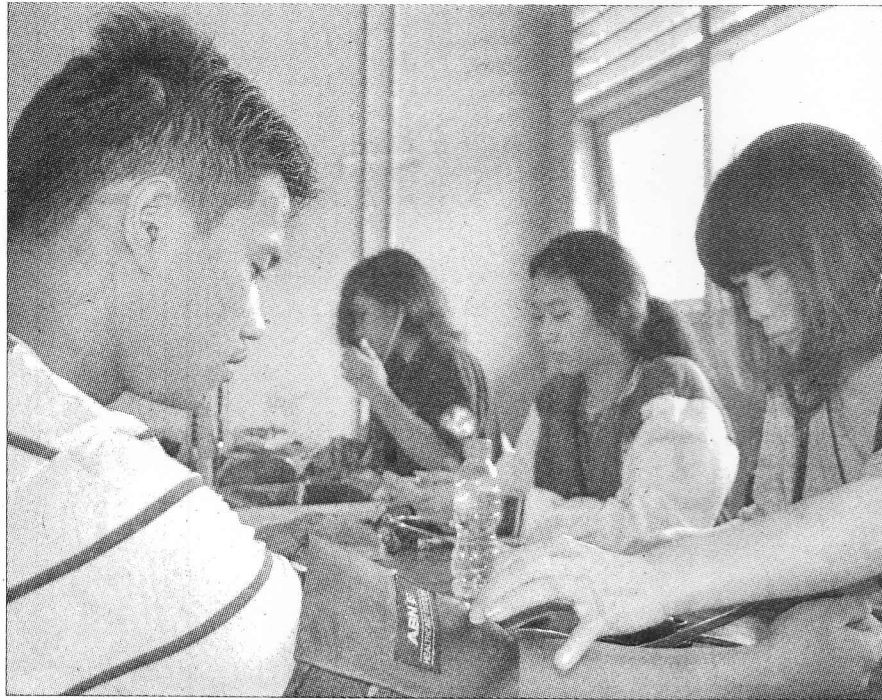


心の不安、軽減を

AMDAが洪水支援 首都で約400人診断

首都圏で起こった洪水の被災者支援として、日本の国際医療救済団体・AMD A（アジア医師連絡協議会、



本部・岡山県）は24日、被害が深刻な北ジャカルタのブンジャリンガンにあるジャカルタ第9工業職業訓練高校で医療診断を行った。

日本から派遣された看護師の山路未来さんと調整員のアロイシウス・シタミさんのほか、AMD Aインドネシア支部のハムカ・ラニ医師、アジア医学生連絡協議会（AMSA）の医学生20人が支援活動に参加した。

午前11時、高校の教室で医療診断が始まった。うわさを聞きつけ、続々と周辺住民が詰め掛ける。大半は女性や子ども、高齢者。学校周辺はまた水が残っている。衛生環境が悪化し、多くの住民が健康を不安視していた。

診断する山路さん（右）に症状を伝える住民

「どこか具合の悪いところはありませんか」と聴診器を患者の腹部に当て、診断する医師と医学生。患者の多くは上気道炎、皮膚疾患、下痢を患っており、解熱・鎮痛剤、下痢止めやビタミン剤などを処方した。心理カウンセラーも帯同し、子育て中の母親や高齢者などの相談に応じた。

診察を終えた山路さんは「洪水後の衛生環境が悪く、被災後の早い時期に診断を受ける必要がある。少しでも心の負担を軽減することが大切」と訴えた。

また、高校で避難生活を送る住民に、不足している紙おむつやミルクなどの乳児用品、生理用品を配布し、周辺の家を2時間掛けて訪問診断した。

プリタ・ハラパン大学医学部に通うナタシャ・シェリエル・スディアナさん（20）は「被災後の定期的なケアが住民の復興への助けになる」と継続的な支援の重要性を語った。

AMD Aは、21～24日に西ジャカルタのグロゴル、西ジャワ州ブカシ県を訪問し、医療診断を実施。3日間で約400人の住民を診

察したという。AMD Aは今後、被害状況を見て、被災地域の支援を検討していく予定。
ジャカルタの洪水被害を受け、募金を受け付けている。詳細はAMD Aウェブサイトで (<http://amda.or.jp/>) まで。

（小塩航大、写真も）